

Title	メウレヴィ修道士の一側面：その巧芸生活面
Sub Title	A side view concerning the living behavior of Mevlevi Dervish
Author	三橋, 富治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.351(513)- 369(531)
JaLC DOI	
Abstract	The most characteristic Sufi Order in Anatolia was the Mevlevi Dervish Order founded by the relatives and adherents of famous Persian mystical poet Djelaleddin Rumi (d. at Konya 1273). This order gave the influence considerably upon both Anadolu-Seljuk and Ottoman dynasties in the cultural and political spheres. This brief survey concerns mainly the Mevlevi Dervish as an artistic craftsman. Apart from its belief, ritual and custom, the members of this order showed outstanding ability in wide extent of an artistic field. Since the secularization of Turkish Republic, this mystical order was abolished. However, its industrial art objects are remaining in Asia Minor and preserving the past glory of Turkish Muslim.
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0355

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メウレヴィ修道士の一側面

—その巧芸生活面—

三橋富治男

(一)

一九六七年六月トルコ共和国文部省 (Millî Eğitim Bakanlığı) から研究援助を受けてイスタンブル大学・アンカラ大学ならびにアナトリア、東部トラキアなど諸地域に散在する歴史的に由緒ある都市を歴訪する機会をえた。その際したしくコニア (Konya) の地に足跡を印し “ヤーリハズレッティマウラーナ” の額を掲げるマウラーナ廟を訪れ仔細に観察するに及んで多大の感銘を受けた。この忘れ難い感銘をこめて拙稿を松本先生の頌寿に捧げる次第である。

(二)

アンカラ方面から見渡す限り広漠としたアナトリア高原を南下してジハンベイリを経由、コニアの市街地に入ると直ちに目につく僅かばかりの遺趾でしか今は偲ぶよすがないが、アナドル・セルジューク王朝の栄えた時代のコニアは、国都として政治的・文化的ないし経済的一大中心地を形成し、王朝の気高き権威を誇つていた。三たび西欧十字軍の馬蹄下に

蹂躪を受け、時に又、オグーズ系ダニシマンド王朝の兵力によつて包围を被り、やがて大モンゴルの支配に属することを余儀なくされたとはいへ、コニアは国都にふさわしい面目を依然として保持できたものゝ如くである。

さて、この王朝の領有を地中海辺から黒海辺にまで拡大し最大の支配圏を樹立したるアラユッディーン＝ケイクバート一世の盛世期〔一二一九—三六年在位〕も過ぎ十三世紀の末葉、王朝そのものが政治的命脈を失う終末期に近づく頃、このコニアでは、スーフィの至聖として仰がれるマウラーナ＝ジョラレッディーン＝ルーミ (Maulana Celaleddin Rumi 一一〇七—一七二年) の後継者、縁故者門弟、支持者たちが後世に大きな影響力を及ぼす宗教的集団を組織した。この宗教集団は、イスラム神学のオルソドックスなスコラティズムの抽象化された、見方によつては人間不在にひとしい論理的概念の追求だけに終始する態度には飽き足らず、一般民衆の理解と感情から大きく遊離するオルソドックス神学の方面への抑制をもこめて神への直接的な接近、神と人間との個別的、感應的な交流を念願していた。

この集団の根底に流れる思想の支配的な要素は、云うまでもなくタサウウーフ、つまりスーフィのそれであつた。小アジアの居住者という意味でルーミと呼ばれるジェラレッディーンは真摯な一個のスーフィとして人間と人間性とを追求してやまなかつた。人間ないし人間性に対しての惜しみなき、無限にして完全な愛は“神の愛”であることを確認しそうした立場に立脚して体験を積んだこの聖者は、最大の寛容度を以つて積極的に自己の思想を後述の如き詩篇、音楽、特殊の勤行を通して民衆の間におしひろめようとした。

抑々スーフィの立場にたてば、人間そのものは、本来、神から発源するという根本認識のもとに人間には当然神性が付与されている筈であり、人間や事物の置かれている境遇は、そもそもであるが、神に導かれて窮屈的には唯一の本原たる神に再吸収されて存在を止揚すると諦観した。たゞし、およそ人間には三つのタイプがある。第一の部類は、俗物で日常の生活に自己を奪われて宗教には全く無縁の済度し難い衆生、第二の部類は理性の人で、神の表面的な属性や啓示によつ

て知的に神の存在を認識できる人、第三の部類は、靈の人で、直感を通じて神を感じ取ることのできる人と区分している。

上述のコニアに生れ出た如上の宗教集団は、いわば、第三の部類の人々で、冥想と勤行を通じて自我を“神の愛”的に没入せようと試みるジェラレッティーン・コルームの神秘主義的な解釈に吸引されたグループであつた。

かくして新たに生まれたスーアイの集団はジェラレッティーン・コルームに冠せられる敬称マウラーナに因んだ、“メウレヴィ”という名称を以つて呼ばれた。

マウラーナとは、イスラムの聖職者ないしスーアイの名譽ある最長老に与えられる称号で、“我が師父”を一般には意味している。“メウレヴィ”なし“メウレヴィヒ”の代りに“ジエラリヒ”(Celâîye)と呼ばれる事もあつた。

例えば、コニアを訪問したことのあるイブン・バトゥータは、この呼び名を以てメウレヴィ教団を指称し、マウラーナとその教胞友愛団体は、この地域の民衆から深い尊敬を受けてゐる述べている。⁽²⁾

なお又、“マウラーナ”という言葉は、時折“学識者”“尊敬に値する人物”という程の意味で使用される事例もある。

ジエラレッティーン・コルームの神秘主義詩人としての又宗教史上の意義については、ニコルソン(R. A. Nicholson)、アーベリ(A. J. Arberry)など権威ある古典的名著の論文があり、やがて本原資料的にはイランのフルーザンファル(Furuzanfar)の研究やトルコのアブドゥルバキギョル・パナルル(Abdülbaki Gölpinarlı)の『Mevlânâ Celâleddin Hayati, Felsefesi, Eserlerinden Segmeler』〔メウラーナ＝ジエラレッティーン〕なる『Mevlânâ dan sonra Mevleevilik』の労作などがあるが、イスラム神秘主義思想の昇華者ジェラレッティーン・コルームは新しく社会進歩に応じてスーアイズムの黄金時代を築きあげた功績者であり、長い歴史経過をもつスーアイズムは、このルームを以つて完成の域に達したといわれてゐる。

大詩人としてのルームは、イラン系の最高レベルの垂訓詩人として名高いサナーハ(Sanâ'i 1150年没)アッター

ル (Attar 1111〇没) と並び称せられる位置を占めていたとだけ述べておこう。⁽³⁾

なおルーミーとアッタールとの関係や、アッタールの作品に就いては、すでに東京外大・黒柳教授の論考がよく伝えているので。その方に譲りたい。⁽⁴⁾

神への絶対的な信頼、冥想、陶酔^{エクスタシ}といった境地を通じて、神の愛に触れ、最後的に神人合一の到達を説くルーミーの思想は、テオリーの本質的な相違にも抱らず、外見上、インド思想のうちでも、仏教のニルヴァーナやヴェーダンタ哲学のフアーナに類似点があると見做され勝ちである。

イスラムの弘通以前の東部イランや、マワランナフル、とりわけルーミーの父祖の郷里に当るバルフの地域は、仏教宣布の土地柄であつたことから、そうした類推が生まれたと思つ。

だが、デニライシヤ=オリアリ (De Lacy O'leary) の名著『アラビア思想とその歴史における位置』(Arabic thought and its place in History)⁽⁵⁾ や、アンリー=セルイヤー (Henry Sérouya) の『アラブの思想』(La pensée Arabe)⁽⁶⁾ なども指摘するように、思想的に直接のつながりを求めるには困難と云ふべきであらう。

ともあれ、そうした比較宗教的な検討は、しばらく置くとして、茲ではアナトリアの土壤に定着したスーアイの偉大な民衆教化者としてルミーが、子息のスルタン=ウヘレド (Sultan Veled 1115—1313年)と共に讃仰されていたこと、現今でも長時間坐して真摯な祈りを捧げる信奉者の多いことを述べておけば充分であらう。

例えば、史実考証によつてもルーミーがアナドル=セルジューク王朝の君主ルクン=エッディーン=キリギジ=アルスラン四世 (一一四八—一六四年在位) からは、「師父」と仰がれて尊敬が払われていたことが判るし、又、ペルワーネ=ムイン=エッディーン=シムレイマーンの宮宰時代 (概略一一六〇~年七〇年代) には、この大臣が配偶者のギュルジュ=ハトンと共にルーミーの思想に共鳴して、行政面からの援助を与えていたことが伝えられている。⁽⁷⁾

従つて、一一七三年におけるルーミの逝去は、この聖者を敬慕するスーアイーたちからは宛もシェイーフ・サドルツディーン・コニエヴィ（Seyh Sadriuddin Koniev）が生々しくも表現している如く、『珠数は切れて散乱した。師父の逝去は世界の寂滅である』といつた大きな衝動を以つて受けとられたものらしい。

ルーミの思想的影響は、単にイスラム教胞社会のうちにばかりとどまるものではなかつた。宗教哲学的基礎において汎神論的傾向をもち、あらゆる既存宗教に対しても非閉鎖的であつたが故に、コニア存在のキリスト教徒や、ユダヤ教徒、人種的には、ギリシア人、アラビア人、トルコ人など、ルーミに私淑し、その逝去に際しては、貴顕上流層にまじつて諸他の教徒が參集して愛惜と哀悼の意を表したというのは、恐らく事実であろう。

例えば、シエムス・エッティン・アフメット・トリエフリヤキー（Sems ed-Din Ahmed Ehâki 一一六〇年没）の著わすルーミに関する回想録『Menakib ùl-Arifin』〔知者の徳行録の意〕は、ルーム・セルジューク史研究のための本原史料の一つとして重要視されるものであるが、そのなかで、そうした事情について触れているのも一つの証示となろう。

オスマン国家が勃興しビザンスを攻略して政治的中心地が、イスタンブルに移動する以前においてコニアは、既に小アジアでの政治的都市としての性格は薄れていたとはいえ、アナトリアきつての宗教、文化、学術都市としての重要性を失なつた訳ではなかつた。

イブラヒム・ハック・コニアルの近著『コニア史』（Konya Tarihi 一九六四年、コニア刊）によると、ルーム・セルジューク王朝時代のコニアには宛もオスマン王朝のトプカプ・サライ建設に匹敵するような大きな設営が行われていた。幅広い道路には両側に家々が立ちならび清らかな水流が湧出する泉水、ミナレット、ドーム、薇薔薇園のたゞすまいの如きトルコ人の首都に恥じない景観を呈していた。当時のコニアでは、異教徒が行きすりの道すがら讃美歌を口ずさんだり又旧約聖書や、福音書を講読しており、イスラム教徒もそれを阻止することが出来なかつたという。

このような、いわば汎神論的な情景から推して、上述の如くルーミの逝去に際して異教徒が哀別の情を示したところで何ら不自然ではなかつた。

メウレヴィ教徒としてのエフリヤキーが、「この聖者「ルーミ」によつて我々は、イエスや、モーゼやすべての予言者の本然の姿を身を以つて知つた」という表現は、このことを裏づけているかに見える。⁽⁸⁾

イスラム宗派としては、『スンニー』に所属しながらも地縁的関係と、アラブからでなくイラン人を通じてイスラムに改宗した歴史条件からトルコ系のアナドル・セルジューク王朝がスーフィズムに心を引かれ、聖者崇拜を受容したとしてもいさゝかも奇異ではなかつた。

こうした諸点から推測すると、ジェラレッディーン・ルーミを追慕して新らしく樹立された教団は、少くとも、コニア宮廷グループの嗜好にかない、その庇護を受けて宣教活動を開始するのに都合のよい要因を備えていたと解してよい。

たゞ一言して置き度いのは、アナドル・セルジューク史上、またその後続段階たるオスマン史の推移の上で名高いメウレヴィ・デルヴィシュのタリカト〔教団〕ないしテッケ〔修道院〕がアナトリアの土壤に深い根をおろす条件を思い合せる場合、スーフィズムの流伝形式もさることながら歴史的な背景としてモンゴルの武力的重圧、封建制の成熟と共に加わる村落農民への税負担の加重、それに伴う地方反乱、オグーズ集団の治安攪乱などと絡み合つたコニアの政治・経済的な衰退と関係しての時代的な要請が介在していた事情をも見逃せない。

十三世紀にアナトリアの諸都市で活動を開始した他のタリカト、例えば、「カーデリリー」・「イスハッキー」・「カレンデリリー」の如きテッケの発足も、大なり小なりに類似の条件が作用したと認むべきであろう。

さて、メウレヴィ教団所属のスーフィたちは、さまざまな特色をもつていた。

第一には、教団は、万人に對して集団的閉鎖性をもたないことがあつた。第二には、特色ある服飾の点であつた。主と

して、シッケ [Sikke フェルトのかぶりもの] デステグル [ジャケット]、エリフリラーム＝エンド [胸帶] テンヌレ [長いひだなしのスカート] ヒルケ [外套] などより成る服装は、起源において本来、喪服を形どつたものといわれている。

第三には、イスラムの安息日に行われる非常に特徴的な宗教的な勤行セマー (Semâ) ないしセマウ (Semag) であつた。セマーリハネと呼ばれる“クッズ” [屋根の] の付いた広間 [現存のものはカヌー＝ニーシュレイ] に修道士たちが集まり、広間内部に設けられたバルコニーの上で指導僧がコーランの章句を唱えるのを合図に叩頭し、やがてネイ [葦笛]、レバブ [ギター] チャルバラ [タンバリン] ダイレ [タンバリ]、ケメンチエ、ケマンなどの管弦打楽器合奏のリズムに調子を合わせて、行列をつくりながら、ゆつくり旋回をはじめ、両腕をひろげ、首筋をそらせて左足の踵に重心をかけて次第に加速度的に旋回を行ない無我の陶酔境に入るのがセマーである。

このがセマーは、彼らに“踊るデルヴィッシュ”、より正確に表現すれば“旋回するデルヴィッシュ”という名称を与えた。⁽¹¹⁾ 勤行としてのセマーは廃止されてはいるもののトルコ・イスラムの文化財、コニアの観光資源という意味で今なお存続がみとめられている。

(三)

序論はそれ位に留めて本論たる巧芸生活面に移行しよう。

さて茲に云うことは、殆んどあらゆるメウレヴィ関係の陳述資料が、ジエラレッディーン・ルーミと、スルタン・リウエレドについて、両者が技能と熟練とを必要とするそのまままな手工芸を極めて高く評価し、幅の広い枠のなかで受容して一つのまとまつた文化財の形に仕上げるよう方向付けていることを物語つてゐる。

このメウレヴィの聖者は、スーアイであると同時に工芸デザイナとして図案・意匠は素より音楽・詩文学などの面で広

汎・該博な知識を持ち合わせていたことが証拠立てられている。⁽¹²⁾

例えば神秘主義思想を根底に織り込んだ体系づけられない六巻より成る深奥なる寓話的詩篇『マスナヴィ』は、ルーミの後継者にはコーランに匹敵する最も重要な著述でトルコイスラムの知的見解を示す著述全般を通じて最高峰と評価される作品であるが、この詩篇のうちでも若干の紙数をさして工芸に関する豊かな考え方を表示している。⁽¹³⁾

このような手芸的な技術面への格別深い関心について、その理由を推測する場合に云うることは、まず神人合一の法悦境にしたるため、アッラーの祝福と靈感とを求めて勤行に精根を傾けるスーフィ自体の立場と、一方、他の者を搾取することなく生活し、みずから勉励・力行によつて生産の道にいそしむ手芸者ないし、それらの属する職業集団＝エスナーフ「ギルド」の占める立場とはおのずから相通するものがあるという自意識、第一には、技芸ないしそれに携わること自体、教団構成員の团结力を強める紐帶と考えられてきたことなどから来てゐると思われる。

そのような、いわば類似の思考方式の上に立つてこの教団に所属するデルヴィシュたちにとつて精神界の形而上的な活動以外に、物的世界では模範たらんとして努力を積むことが遵守すべき宗教的勤行の一つに繰り入れられていた。このことは、クレマン＝ユーアル (Clemens Huart) の、今は古典的な稀観書となつた。『ニア、旋回デルヴィシュの都』第十一章のなかで触れているところである。

ルーミは、神人交流のためのズイクル、すなわちリズミカルな唱名の繰り返しや、音楽、セマー〔旋回舞踊〕を媒体として心理的陶酔三昧に没入する場合、最も卓趣した手工芸の名人氣質ともいふべき心境を以つて、デルヴィシュたちを深遠きわまりない新らしい世界に誘い入れる試みに成功した。しかも、こうした基盤の上に立つて、十三世紀後半に発足した新らしい力強い“思想の流れ”を受けとめて、これをルーミ追慕者といつたいわば一握りの集團からアナトリア全域に波及させる上で決定的な役割りを果したのが外ならぬスルタン＝ウェレドであつた。

ルーミを慕い、その教義に深く心酔する知識層のエリートは、コニアから主要都市に分散して勤行を通じてマウラーナの教義を民衆に浸透せしめ、ワクフの許与をえてメウレヴィ・ハネが各処に建立された。タルバード・モムターズ・ヤマンの『カスタモヌ・ターリヒ⁽¹⁴⁾』によると、アマスイアのメウレヴィ・ハネは、パルワーネーム・イン・エッディンの子息の寄進建立になるものであつたという。

この教団がアナトリア全土に拡散し底深く根をおろす一助となつた側面をさぐると、地方郷村を巡歴して手工芸面での技能開発に努力を傾けた明白な事実にぶつかる。

初期の、いわば、古典的メウレヴィ・ハネとそれに所属するスーアーイ・たちは一介の勤行者たる境遇にも拘らずイスラーム・トルコ人の特性を示すという形で多くの不朽の活動の足跡をアナトリア諸地域に残したのであつた。

この意味で、メウレヴィ教団を以つて修道面で特色をもつデルヴィシュとしてのみ捉えるのは片面だけの観察で当をえた見方とは云えないこととなる。

メウレヴィ教団の詩文学から手工芸を含むあらゆる部門での活動の原動力となつたものは、この教団での中核体で指導的地位にあつた才能豊かで思索と経験とに富むピール「長老」のオジャク〔率では中心指導者群〕であつた⁽¹⁵⁾。

では翻つて何故に、十三世紀という時点、コニアという特定地点で、このように将来、さまざまのトルコの社会階層に對して深い影響力をもつ一個の手工芸の伝統性が生まれ出たのであろうか。それには、それなりの理由があつた。アナドル・セルジューク王朝の開明的なスルターンの庇護的な態度がそれで、それらの王者が、イラン方面に對して宗教哲学や詩文学の鼓吹者を求めたとすれば、アラブ系の造型、建築師などをマムルーク朝治下のシリヤ方面に求めていたこと、さらにも又、コニアは、他の西アジア地区と同様に、モンゴルの来襲を受けたにも拘らず、スルターンが、最も低姿勢でモンゴルの大汗に接し、大汗のために甘んじて租税徵収受け者たる義務を果したため、イラン諸都市や、バクダードのよう

な破壊の憂き目に合わずに済んだことなどが幸していた。

従つて、この未戦禍の都市に安住の地を求めて来帰する東方世界の学識経験者、スーアイ、詩人、腕に自信のある職人たちは、期せずしてコニアの文物を興隆せしめ、しかも「完全に折衷的な混和状態」に置いたのである。⁽¹⁶⁾

如上の雰囲気のもとにコニアが旧い政治的中心地から宗教的中心地に生まれ替り、しかも手工芸の楽園化したのは、必らずしも偶然事ではなかつた。それらの推進力となり積極的に誘導した存在こそ外ならぬメウレヴィ教団であつたといつて決して過言ではない。

能書家、図案意匠家、裝飾家、建築師、樂師、詩人、医療師などより成る細分化された技能の世界は、コニアの土壤に極めて良好な培養地を得た訳である。⁽¹⁷⁾

有名な肖像画家では、アイニュッデウルー⁽¹⁸⁾ (Aynüdddevle-i Rumî)、フレスコのデザイナでは、シェイイーフ=ベシム・ベイハディイ・ヤワーシュ (Seyh Bedreddin Yavâş)、裝飾デザイナとしては、アラフッティイ・ンルヤヌシュ (Aladdin Siryanus)、製本装釦のデザイナでは、ムフリス=ビン=アブドゥラ (Muhlis bin Abdüllah) などの著名な手工芸家があるが、それらは、いずれも、ルーム=セルジューク朝治下のメウレヴィ教団が生み出したデルヴァイシュたちであった。

とくに、最初に掲げたアイニュッデウルー⁽¹⁹⁾に就いては、この者の生涯と作品に関する記録を読むならば、この時代における極めて質の高い手工芸家であつたことを知るのである。例えば、上掲のエフリヤキーの『Menakib ül-Arifin』論及などが、このことを示している。

アナドル=セルジューク朝時代にアナトリアで、イスラム=トルコ族が作成した初期の手工芸作品は、今なおコニアのメウレヴィ博物館、アンカラの民俗博物館をはじめ各地のコレクションなどで見掛けることができるが、そこでは、繊細と

驚異、光輝と、幻想的な魅力といった要素をたたえた作品に接する機会を与えて與れるのである。

(四)

アナトリアに所在するアーレ (Ahî)、ババーアイ (Baba'i)、メウレヴィなど含むデルヴィシュを、初期オスマン君主、例えばオスマン二世、オルベン二世などが国ぐるりに際して利用した事情や、ムラト二世 (一世) 以降イスタンブル攻略時に至るまで、オスマン軍団は、タリカトの団員を戦闘に伴う“しきたり”があつて、オスマン二世時代に入ると、メウレヴィ教団は、その地歩をいよいよ固めて教勢を確固たるものにする便宜をえた。とりわけ、スルターンも宮廷高級官僚もメウレヴィエに対してもいなる愛情を抱いていた形跡がある。

とくに、ルーミの後裔は、歴代スルターンから優遇されたので、この教団を社会に影響力のあるものに仕立てた。

今はイスタンブル大学の教職を退き黒海入口に近いビュユク＝デレに自適するイスマイール＝ハックル・ウズン・チャルシュル教授の証示によると、この教団が教勢を局地的から全国的規模に拡大して行く時期は、十四～十五世紀に掛けてである。⁽¹⁹⁾

ではメウレヴィ教団と、オスマン王朝とは、どうのよつた間柄であつたか。この間の消息を物語る一齣として、まず、ジエウデット＝ペシヤの名著『オスマン兵事史』 (Cevdet Paşa: Tarih-i askerî Osmani. İstanbul, 1297—1879) の記載を参照しよう。

それによると、すでにオスマン第一代のオルベン二世の王子ショレイマーン＝ペシヤは、マウラーナ＝ジョラレッディン＝ルーミの孫ウル＝アリフ＝チヒンビイ (Ulu Arif Çelebi) がメウレヴィ＝シェイイーの被る帽子を贈られたことを明らかにしているが、このことは、恐らく両者間の友好関係を示す意志表示として受け取つてよいであろう。

次ぎに、ヤウト＝セリム一世 (一五一一～一五二〇年在位) が、一五六六年にシーア派イランのサファヴィイ王朝を攻撃

するためニニアを通過した際にメウレヴィイハネの破壊を命じたことが伝えられているが、その際にもメウレヴィイシエイーフに対する敬意は失われなかつたといわれている。

40代に又、シラフダル=ファン=ディクル=メフメット=アーサー (Silahdâr Findiklî Mehmet Ağa) の史著『シラフダル=ターリヒ⁽²⁰⁾』によると、アフメット一世 (一六九一一六九五年在位) は、デヤル=バカルの知事に任命されるためエデイルネ王宮に伺候したハッジ=アリ=パシヤの紋任の儀式に際してわざわざメウレヴィイシエイーフの服装をして頭にデルヴィンユ帽をかぶり、その上に格子縞のターバンを巻き、手にデルヴィンシュ杖を握り、背中にデルヴィンシュ外套をまとい、又侍従たちには一様にベクタシュ=デルヴィンシュの扮装を行わしめて臨席したといふ。⁽²¹⁾

どうして、このようにメウレヴィイシエイーフが尊重されたが、それには多分に伝承的ながら彼らがルーム=セルジューク王朝から信任を受けた縁故とか、法灯を引き継ぐ正統性を主張しつる立場にあることを認めていたことにあるらしい。

因みに、コニア在住のメウレヴィイ教団の最長老は、ムラー=ファン=キャル (Mulla Hunkâr)、ハズレッティ=ムラ (Hadreti-pir)、チヨンルイ=ムラー (Çelebi Mulla)、アズイズ=ファン=ディ ('Aziz Efendi) の如き、まあまあ呼び名を以つて呼ばれていたことをも附記しておきたい。

メウレヴィイシエイーフが、新らしく即位するオスマン君主の大典に出席して、帶劍せぬ伝統的な権利も、上述の如き、ルーム=セルジューク王朝に關係ある縁故者という考え方から発想してみると見做してもいいであらう。

ただし、この権利は、一六四八年以前には溯りえないと云うのが、『スルターン治下のクリスチャニティとイスラム』 (Christianity and the Islam under the Sultans. Oxford. 1929) の著者ハズルク (F. W. Husluk) などの見解である。右様の如く、かく、メウレヴィイ教団が尊重されたのは、オスマン王朝の政治的考慮に基くもので、イェニ=チヨリのオジャクの支持者たるぐきぐクタシュ教団の教勢と均衡を保たしめための作意であり、一方またズイーン=ミに対し

て、モスレム社会の特権意識をふりかざすウレマー階層の勢力に対抗するための実際政治上の牽制手段であつたとも説明されている。

なお又、イエニチエリ史の一つの側面としてエピソード的な話題であるがオスマン王朝はアジェミー・オウラーンの教育に際しルミーの上述著『マスナヴィ』を教材として使用していた。⁽²²⁾ このような諸般の情勢はメウレヴィの教勢維持と拡大に有利に作用したとみるべきである。

(五)

十七世紀オスマン・トルの有名な大旅行家エウレヤリチエレビイ（一六一一—一六八一）は、その著述『セアハートリナーメ』においてオスマン王朝時代のコニアの状況を次ぎの如く描写している。

「コニアには光輝に充てる聖者ジエラレツデイン・ルーミの墳墓と、近くに二個のミナレットをもつ崇高なる回教大寺院、「セリム一世のモスク」メドレセ、優雅なる礼拝堂、セマーリハネ、救貧施食所、祝宴のための家、デルヴィイシュのための幾多の小部屋がつくられている……」

又、一七七九年にメッカ巡礼のため、イスタンブルから出発して、途中コニアを訪れたエディブ・イブニ・メフメット・デルヴィイシュは

「コニアには、回教大寺院や、さまざまの館、かずかずの浴場、市街地区、賑やかなバザールなどを含む大都會である……」

と述べて、現今とあまり変らぬメウレヴィの大本山周辺の様子を伝えている。オスマン王朝時代には、メウレヴィ・ハネの建立は、アナトリアのみならずルメリーの主要都市ないしキュプロス島〔例えば、ニコスイア⁽²³⁾〕、シリア、エジプト方面

にまで及んだ。要約すれば、メウレヴィリハネの所在地は、オスマン所領に限定されていたといえ、発祥の地コニアを大本山とし、第一級の格式のものに、マニサ、カラヒサル、バハリエ、ゲリボル、ブルサ、カイロ、第二級の格式のものにメデイナ、ダマスクス、カラマン（ラレンデ）ラムラ、セラニク〔サロニカ〕などがあつた。

首都イスタンブルでは、ガラタ、ベシクタシュ、イエニカプウ、カスムパシヤ、ユズキュダルのメウレヴィリハネがよく出てくる名称である。

扱てメウレヴィ工芸史の研究面での第一人者として認められるシャハベッティン＝ウズルク (Sahabettin Uzluk)によると、オスマン＝トルコで芸術的な図案・意匠が、高度に発展を示すのは、一般にファティーヒ＝メフメット一世の子ベヤズィト二世〔一四八一—一五一一年在位〕の治世と見做されているが、この時代を代表するものとしてアブドュル＝ラフマーン＝ユル＝メウレヴィ (Abdürrahman ül-Mevlevî) の名をあげる必要がある。

この者は、極めて優れた室内装飾家として知られるが、最も著名な作品には、コニア所在のジェラレッティン＝ルーム廟の内部装飾である。

優雅にして精緻な芸術センスをよく保持する円天井の内部や壁面の装飾は、技能面での卓越性を示し、如何なる高次の審美眼にも耐えうる気品の高い作品である。

長い年代の経過にも拘らず、好もしい快調な色彩と装飾、図案とは恐らく作成当時その儘の新鮮さと輝きとを留めていると見るのは筆者のみであろうか。ともかく人間の魅力、财力、忍耐、根気が、いわばこの奇蹟を生み出したもので、今日なお訪れる人々の心を奪うのに充分である。

なかでも“イエスイル＝キュッベ”内部のキブラの壁に、あたかも明かり取りの下のあたりに施された装飾と、糸杉の意匠の下にあつて、塗金した部分に美麗な金色の文字が浮き彫りにされているのが人目を惹くが、それによるとヒジュラ暦

八八七年（一四八一年）の作品であることが知られる。⁽²⁴⁾

その他、オスマニ=ヘル^ト時代に活動したメウレヴィイの手工艺家の系統に属する知名人としては、デルヴィシュ=メダル=ムスタファ（Dervîş Medarı Mustafa^ト若年期にカラマンやカラニヒサルのテッケで修業し、老年期にはコニアに在住）、ベフザド（Behzad^トヘリ=ナリ出身で、ガラタ=メウレヴィイハネ所属、動物画・肖像画の名手）、フェンニ=メフメツトニ^ト（Fennî Mehmet Dede^ト肖像画、構図家）その流れを吸むファスィフニ=デ（Fasif Dede）ハヌープルニ=デルヴィシュ=ハサン（Eyuplu Dervîş Hasan^トシクタシュのデルヴィシュハネのシヒーフ、図案家）その他、陶芸面でのムスタファ=アガ（Mustafa Ağa）、音楽面ですぐれたハッスピ=デ（Hasip Dede）など⁽²⁵⁾の名前も見落す訳にはいかない。

それらの人物は、いざれもメウレヴィイハネで熟練したシェイーフやデルヴィシュの間で研鑽を積み重ねて大成した経歴の持主であつた。なかでも、装飾、画像画の面では、ルースの肖像とか、ルースの友人やシヨリト〔デルヴィシュの見習生〕、デルヴィシュの群像、セマーの場面、マウラーナ廟を訪れたオスマン君主の図〔例えればカヌーニン^トコレイマーン〕その他のメウレヴィイ藝術ならではの取材など、教団史研究のための素材を提供して貰れるものである。

十七一八世紀、ことに名眉な風光とか王宮、キヨシク、海、森の狩獵などより成るチュリップ時代のイスタンブルの生活を生き生きと再現して貰れるのもメウレヴィイ画家であつた。この時代の著名なトルトニニアチャールの名手であり、又詩人として知られるルンビ（Levni^ト一七二二年没、一説では一七三三年没、本名 Abdül Celil Çelebi）の大作、セイイトニカ^トベフビイ（Seyit Vehbi）の『ベル=ナーメ』（Surname）の挿画によると、ネイや、タンブルを奏する楽師としてのメウレヴィイ=デルヴィシュが画かれており、都市生活上、やがて物の機能を果して居たことが推測である。⁽²⁶⁾

茲で名前を逸してならぬメウレヴィイ図案家として、アラビア文字の“ムスラ”（詩句）を組み合せた有名な鶴の図案

を画いたハサン・リエキ・デデ (Hasan Leylek Dede 十八世紀の末葉) がある。

このように十八世紀まで、メウレヴィヨハネからは、数多くの能書家、塗金師、装飾師、図案意匠家、楽師、製本師、彫刻師、詩人、医療師などが輩出した。それらのシェイーフや、デルヴィシュは精神面での活動と、物的世界での技能とを平行させて、相互に補足大成することができた。

オスマン社会の服飾デザインについて、例えば頭部を被う金色のデルヴィシュ帽、背中にまとう細長い切口をもつた外套など、メウレヴィの手工芸家に帰するものが多いように感ぜられる。

(六)

ロンドン大学のハミルトン＝ギップ (H. A. R. Gibb) 教授の『Mohammedanism⁽²⁷⁾』などでの分類によるし、メウレヴィは“都市型のデルヴィシュ”いわゆる Urban Order として知られ、従つて都市のエスナーフとのつながりも一しほ深く、モスレム世界で特異の位置を保持していた。都市を中心にメウレヴィ修道士は、以上の如く豊かな知識と、それに匹敵する優れた技能を以つて、そのままな古典芸術作品を、アナドル・セルジューク時代、オスマン・トルコ時代を通じて世に残した。だが、ケマル・アタチュルクの“民族革命”が成就して以後、共和国政府の手で政教分離政策の一環として、デルヴィシュ教団が廃止されたのは又当然の成り行きであつた。というのは、オスマン王朝末期の諸スルターン、例えば、アブドュル・アズイスにせよ、メフメット・レシト（五世）にせよ、この教団のメンバーであつた関係や“青年トルコ党”的政治活動におけるメウレヴィ教団の果した役割りの重要性などから、この教団が、王朝党与の残滓と目せられていたこと、さらに又、アンカラにて開催の第一次、大国民議会の構成メンバーの五分の一が、ムフティないし教団の指導者を以つて占められ、それらが、殘余の軍人、官僚ないし小都市商人出身者に相当の影響力をもつっていたという事情から、教団

を放置した儘の状況では、政治革新の進行は思いも寄らなく考えられたからである。⁽²²⁾

このようにしてメウレヴィ教団が廃止されて以後、テツケそのものゝ施設や建物は博物館に転換されたことゝ、今やトルコ領でないシリアのアレッポその他の中東の諸市に若干のテツケが存在するのみとなつた事情から、この教団について顧る者が年々減少する一方であつたのも止むをえない趨勢であつた。

同時に又、デルヴァイシュの手工芸作品の多くが放置された儘、時折、図書館の片隅などに塵をかかる状況ともなつた。だが、近來、マウラーナ＝ジエハノニアインニルー^ムの廟が、トルコや、ペキスタン、インドの信徒によつて巡礼地としての尊ひの名聲を回復し、一九五三年十一月十七日には、ルーミ讀仰者の中に、じく地味ではあつたが、由緒あるロリアード「ルーミ六百八十年頃」が讃美されたこともあり、こうした動向を関連してメウレヴィ＝デルヴァイシュの手工芸品での作品が毎年失われて行く運命を惜しむ声が、トルコの国内で聞かれるようになり、その保存策が構せられるようになつたのは、単に復古調の機運としてだけでは片づけられぬ意味を含んでゐる。

図

R. Jockel: Islamische Geisteswelt. 1954. Darmstadt.

- (一) Mehmet Önder (Konya Müzesi Müdüri): Mevlâna. s. 215.
Müzesi Rehberi. istanbul. 1958. s. 2-3. Önder ゼメル
ゼルイ教団關係の資本蒐集と闇やく第 1 人物である。
(二) Ibn Battuta: Travels in Asia and Africa. 1325-
1354. H. A. R. Gibb. London 1959 (Broadway travel-
lers). p. 130.
(三) ハムラバトマハーマー^ムの作權のなかに「ムラタ
ールは我が魂、サナーメは我が眼であった」 と忠誠してゐる。
メウレヴィ修道士の一側面
- (三) 1954. 三六七

(∞) ibid. II. 375.

(9) 実物はコリトの『トウラー博物館』の陳列室に展示されてゐる。

(10) 宗教的動かくの音樂導入という形では、『羅ノモル』が
リシア正教などにてこの宗教行事のキリスト教からの影響
が最も見做す困難のもの。

スルタハニム等が、ギラント語で題してたむかみ出された歌
れた歌であつた。だが、キリスト教には音樂と舞踏とを媒体
として宗教的な鬱屈三昧に入るが如き類例は寡聞にして知らな
い。

たゞ、T. T. Rice: *The Seljuks in Asia Minor*. 1961.
London. p. 125.

(11) M. Cl. Huart: *Konia; La ville des derviches tourneurs*. 1897. Paris. *Les saints des derviches tourneurs*, Paris. 1918. 第11章の Chap XI. 参照。

(12) Sahabettin Uzlu: *Mevlevilikte Resim, Resimde Mevleviler*. 1957. Ankara.

本圖は、アホーリー=ムヒトーハ=スルの壯麗な十五年
を紀念して作成された繪画で、本圖の上部に織機の如き
が少へだ。

(13) 前東外大、蒲生礼一教授の証記の書籍文学大系(筑摩書
房)トドムト・ペルシア集、p. 347-373 参照。昭和三十九年。
たゞ、『マスナガヤ』のやうに使用されたトルコ語々彙等とい

るトモ M. Serefedin. Mevlâna'da türkçe kelimeler ve-
türkçe Şiirler (Turkiyat Mecmuası. 1934. Cilt 4. İstan-
bul. s. 111-168 参照)。

(14) Talbat Mumtaz Yaman: *Kastamonu Tarihi* 1935.
İstanbul. s. 87.

(15) S. Uzlu: ibid önsöz. s. 1.

(16) M. Cl. Huart: *Konia*. p. 216.

(17) S. Uzlu: ibid. I. *Selçukîler Devri*. s. 16.

(18) S. Uzlu: ibid. I. " s. 7-41.

(19) İsmail. Hakkı Uzunçarsili: *Osmanlı Tarihi*. (Türk Tarih Kurumu yayınlarından XIII Seri-No. 16.) 1961.
Ankara s. 534.

(20) ノイの歌謡は、1長音～1長音～1半音～1半音～1半
音～1長音～1長音～1半音～1半音～1半音～1半音
などである。

(21) İsmail Hakkı Uzunçarsili: *Osmanlı Devletinin Saray Teskilâti*. (Türk Tarih Kurumu yayınlarından VIII. Seri-No.15) 1945. Ankara. s. 60 参照。

(22) H. A. R. Gibb & H. Bowen: *Islamic Society and the West*. 1957. Oxford. II. p. 152 参照。

(23) L. & H. A. Mangoian: *The Island of Cyprus*. 1947.
Nicosia. p. 32 参照。

リバベートは十七世紀の建立されたメカニカル・ハーモニカがある、

約400枚のムハマドの壇画が残る。

(24) S. Uzlułk: Mevlvilikte Resim, Resiminde Mevlevi
ler. s. 47-48.

(25) S. Uzlułk: ibid. s. 47-81.

(26) Dr. Süheyli Ünver: Levni. 1957. İstanbul Súr-nâme
は蘇丹の御廟や施したむのドナムニアバサ代のペルターハ、
トヘルヒリ世の王室に関するドナム。

(27) その内蔵は、大阪外大加賀谷寛氏による昭和四十一年「マ
ルマ文庫」の如き解説も記す。

(28) Dankwart. A. Rustow: Politics and Islam in Tur-
key. 1920-55. p. 73. 1957. The Hague
Howard. A. Reed: Religious life of Modern Turkish
Muslim. p. 140-141. 1957. The Hague.

(1977. 8. 11)